

日蓮敎学における惡知識の一考察

——苦岸比丘・勝意比丘について——

原 慎 定

一 はじめに

日蓮は「末法の日本国」の人間存在に共通する宗教的課題として「謗法」という問題を提示した。日蓮にとって「謗法」とは、久遠本仏による救済の意志が示された法華經に対する「背き」の罪業を意味する。

「末法」という釈尊在世から遠く隔たった時代においては、仏法の眞実性を見失った偽善的な出家者や、増上慢に陥った高僧等が数多く出現し、それらが「惡知識」となって社会を惑わして人々を邪見に陥れ、その結果として「謗法」の罪を増幅させていると日蓮は指摘する。その代表的な人物として、浄土念仏の法然、鎌倉律宗の忍性、眞言密敎の善無畏・金剛智・不空、弘法・慈覺・智証等が取りあげられ、かかる惡知識の存在を糾弾して、末法の人々を謗法の罪業から脱却させることが「法華經の行者」の宗教的使命であると主張さ

れる。

このように、日蓮にとって「惡知識」と対峙することは必然的な課題であり、それゆえ遺文中には惡知識に関する叙述が数多く見られる。そこで特徴的なことは、日蓮自身が対峙している惡知識について言及する場合、必ず經典類を基として、過去の歴史的事象を例示していることである。過去の惡知識の先例として多くの人物が取りあげられるが、大きく二つのパターンに分類することができる。

一つは、釈尊在世の惡知識である。すなわち提婆達多・善星比丘などを釈尊在世の惡知識として例示することによって、滅後末法にはそれを越える多くの惡知識が出現することを検証しようとするもので、この点についてはすでに若干考察したところである。⁽¹⁾

いま一つは、經典に説かれる本生譚あるいは因縁談に登場するもので、釈尊以前の仏法における過去世の惡知識であ

る。その典型として、苦岸比丘と勝意比丘という存在が挙げられる。そこで今回は、この「苦岸比丘」と「勝意比丘」について具体的に考察することにより、悪知識に対する日蓮の視点を明確化しようとするものである。

二 苦岸比丘について

苦岸比丘については、『仏藏經』卷中往古品第七⁽²⁾の中で、釈尊が舍利弗に語られた因縁談として、次のように説かれて

いる。

久遠無量無辺不可思議阿僧祇劫の過去、大莊嚴仏の滅後百年、弟子が分かれて五部となり、それぞれ普事・苦岸・薩和多・將去・跋難陀の五比丘が大衆の師となった。このうち、普事比丘だけは仏の所説の「第一義無所得空」の法を弁えていたが、苦岸等の四比丘は皆「有所得」に執着して邪見の道に陥り、多くの人々を惑わし、勢力の弱い普事比丘を軽んじたために仏法はまさに滅びようとしていた。苦岸等の四比丘と、それに従った六百四万億人の弟子信徒は、死後いずれも阿鼻地獄に墮ち、熱鉄の上に焼かれて一大劫にわたって八大地獄を巡る。劫尽きてもさらに他の阿鼻地獄を展転し、たまたま人中に生じても五百世の間は盲目の身となる。その後、一切明仏に師事して出家修行するが証果は得られず、かえって阿鼻地獄に転生する。こうして今日まで九十九億の仏に遭

いながらも、一人として涅槃に入った者はない。その理由は仏の真実の教えを破り、賢聖持戒の比丘を誹謗した罪業によるものである。そして苦岸等の四比丘とは、それぞれ現在の提婆達多・拘迦離・迦(毘)羅・裸形沙門波利摩陀であり、普事比丘とは今の富楼那弥多羅尼子であると、このように説かれるのである。

日蓮はこの『仏藏經』の因縁談について、『注法華經』不輕品の行間に次のように書き入れている。

仏藏經。羅什訳。有仏号大莊嚴如來。○其仏滅度百歳之後。諸弟子衆分為五部。一名普事。二名苦岸。三名薩和多。四名將去。五名跋難陀。○是苦岸比丘。○親近此人。及善知識並諸檀越。凡有六百四万億人。在大地獄。○大劫若焼。○從此阿鼻大地獄中。転生他方。在大地獄。

また日蓮の遺文にはこの問題に関する記述が十数ヶ所に見られる。具体的な叙述としては、『守護国家論』の中に、

第二明難受難受人身。値難値仏法。値惡知識。故墮三惡道。者。佛藏經云。大莊嚴仏滅後五比丘。一人知正道。度多億人。四人住邪見。此四人命終。後墮阿鼻地獄。仰臥伏。伏左脇臥右脇臥。各九百万億歳。乃至若在家出家。親近此人。並諸檀越。凡六百四万億人。与此四師俱生俱死。在大地獄。受諸燒煮。大劫若尽。是四惡人及六百四万億人。從此阿鼻地獄。転生他方。大地獄中。已上。

(一一二頁)

と記され、墮地獄の問題が強調されている。

また『顯謗法鈔』では、悪象は身体を破壊するだけなので悪象に殺されても三惡道に墮ちることはないが、悪知識は身心ともに破壊するものであるから、その存在に惑わされれば三惡道に墮ちなければならないという『涅槃經』の文を引用して、

此經文の心は、後世を願はん人は一切の惡縁を恐べし。一切の惡縁よりは惡知識ををそるべしとみえたり。されば大莊嚴仏の末の四比丘は自惡法を行じて、十方の大阿鼻地獄を経るのみならず、六百億人の檀那等をも十方の地獄に墮しぬ。（二六二頁）

と記されている。この次下には釈尊在世の耆闍摩羅・善星比丘・阿闍世等の行跡が列挙されるが、それらに先立ってこの『大莊嚴仏の末の四比丘』の問題が取り上げられていることは改めて注目しなければならない。なぜなら、苦岸等の四比丘は自ら惡法を行じて阿鼻地獄を経歴したばかりではなく、その邪見に惑わされた六百億人の弟子信徒もまた、一同に阿鼻地獄を展転しなければならなかったのであり、日蓮はこのことを特に問題点として強調していたと理解できるからである。

こうした墮地獄の問題については、『曾谷二郎入道殿御報』の中で、

日本國中、四十五億八万九千六百五十九人、一切衆生如、彼苦岸等、第

子檀那等、墮阿鼻地獄。於熱鉄上、仰臥。九百万億歳。伏臥。九百万億歳。左脇臥。九百万億歳。右脇臥。九百万億歳。如是在熱鉄上、三千六百万億歳。然後從此阿鼻地獄一転生他方。有二大地獄。無數百千万億那由佗歳受大苦惱。（二八七四頁）

と記される。すなわち、日蓮は苦岸等の弟子信徒の墮地獄の様相を詳しく描写し、日本国の一切衆生もまさしく「悪知識」に導かれて墮地獄の危機に直面していることを強く訴えかけるのである。

三 勝意比丘について

過去世の悪知識のもう一人の典型として描かれる勝意比丘については、『諸法無行經』にその行跡が詳しく説かれており、『大智度論』にも説示が見られる。これは文殊師利菩薩の因縁談として説かれるもので、無量無辺阿僧祇劫の過去、師子音王仏の滅後六万歳の末法に現れた喜根菩薩は、世法を捨てず、善惡を分別せず、少欲知足や戒行頭陀行などの小乘的な教えを称賛せず、ただ諸法の実相を説くだけで、弟子を教化して一相智に入らしめた。いっぽう勝意比丘は、持戒清浄にして十二頭陀を行じ、四禪と四無色定を得ていたが、その弟子は鈍根にして多く分別を求めて心が動転し、他人の過失をあげつらうことを楽しんだ。勝意は喜根の説は虚妄な邪見であると謗り、邪説をもって教化していると侮辱したが、

喜根はこれを憐れみ衆僧を集めて、さらに諸法実相の法を七十余偈をもって説き、勝意のために後世の仏道の因縁とした。かくして勝意は生きながら大地獄に墮ち、百千億那由佗劫の間、地獄の苦果を受けることになる。喜根菩薩は東方十萬億の仏土を過ぎた宝莊嚴世界において成道し、勝日光明威徳王如来となる。今の文殊師利菩薩は、その時の勝意比丘であり、墮地獄の罪業から脱却することができたのは、あのとき喜根菩薩の説法を聞いた功德が深い因縁となっているからであると、このように説かれるのである。

日蓮が勝意比丘について言及するとき、前項の苦岸比丘等の行跡と列挙されることが多い。たとえば『諫曉八幡抄』には、

例せば大莊嚴仏の末、四比丘が六百万億那由佗の人を皆無間地獄に墮とせると、師子音王仏の末の勝意比丘が無量無辺の持戒の比丘・比丘尼・うばそく・うばいを皆阿鼻大城に導くと、今、三大師の教化に値て日本国四十九億九万四千八百二十八人の一切衆生、又四十九億等の入々四百余年に死て無間地獄に墮ぬれば、其後他方世界よりは生て又死して無間地獄に墮ぬ。かくのごとく墮者大地微塵よりも多し。此皆三大師の科ぞかし。(一八四七頁)

と記される。また『曾谷二郎入道殿御報』には、

如、彼大莊嚴仏、末、六百四万億那由佗、四衆、各々業因雖異、俱師苦岸等、四人、故同入無間地獄。又師子音王仏、末法、無量無辺、弟子等

日蓮教学における悪知識の一考察(原)

中雖有貴賤異同、為勝意弟子、故一同墮阿鼻大城。今日本国亦復如是矣。(一八七三頁)

と記され、悪知識の影響が端的に述べられる。

このように日蓮は、大莊嚴仏の末の苦岸等の四比丘の行跡と、師子音王仏の末の勝意比丘の行跡を列記することによって、悪知識に導かれた人々がいずれも阿鼻地獄に墮ちたと解釈している。実は、勝意比丘の行跡を説いた原典には、弟子信徒の墮地獄については明記されていない。ところが、日蓮は勝意の弟子信徒もまた阿鼻地獄に墮ちたと受けとめており、ここに日蓮の解釈の特色がみられる。つまり、ひとたび「悪知識」に惑わされて邪見に陥った人々は、必ず阿鼻地獄に墮ちなければならないと日蓮は捉えている。そして、かかる悲劇的な事態が、まさに末法の日本国において現実化しようとしているとして、盛んに警告を発したのである。

四 教理上の問題点

以上のように日蓮は、大莊嚴仏の末の苦岸等の四比丘と、師子音王仏の末法の勝意比丘を、過去世の悪知識の典型として捉えていたことが確認できる。これらは「末法」という時代認識の同時性を機軸としながら、永劫にわたる墮地獄の罪業をもたらし存在として重視されている。すなわち両者は、いずれも仏滅後の「末法」において仏法の真実に背き、弟子

信徒を邪見に陥れて永劫の墮地獄へ導いた「悪知識」として強調されるのである。

ところで、苦岸比丘等と勝意比丘については、そうした悪知識としての共通性が見出されるのであるが、日蓮の内観における両者のイメージは、微妙に異なる部分があったのではないかと考えられる。その相違点とは、概略的に言えば、苦岸比丘等は永劫にわたる墮地獄を繰り返し、救済の見通しが立てられていないのに対して、勝意比丘は喜根菩薩の説法を聞いたことが逆縁となり、やがて墮地獄の罪業から脱却する道が開かれているという点である。

このことは、喜根菩薩が勝意比丘から誹謗されながらも、あえて諸法実相の教理を説き聞かせたところにポイントがあり、それは天台教学における逆縁下種の論理に結びつくものである。この点に関して天台の『法華玄義』には「若信若謗。因倒因起。如_レ喜根雖_レ謗後要得_レ度_二とあり、また『法華文句』には「喜根以_レ慈故強説。如来以_レ悲故発遣」と説かれる。日蓮はこれらの文を『注法華經』化城喻品と不輕品の行間に書き入れており、遺文にも引用している。かくして逆縁下種の問題を媒介として、喜根菩薩の行軌は、法華經の不輕菩薩の行軌とオーバーラップされてくるのである。¹⁰

なお、日蓮は『開目抄』の中で「久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識に値ゆへなり」(六〇一頁)と述べ、謗法の問

題を「三五塵点」経歴の罪業として受けとめている。しかもその罪の根源性は「悪知識」との関係で捉えられていることが特徴的である。このことは教理上の重要な問題点であり、改めて検討しなければならない課題である。

文中引用の日蓮遺文はすべて立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』に拠り、(一)内にその頁数を記した。

1 拙稿「日蓮聖人遺文に見られる『提婆達多』について―悪知識としての一側面―」(『日蓮教学研究所紀要』一二号)、「日蓮教学における逆罪者の一考察―善星比丘について―」(『印度学仏教学研究』四二―二)

2 『大正藏經』一五卷七九四頁。

3 『定本法華經』七一―四。

4 『大正藏經』一二卷四九七頁。

5 『大正藏經』一五卷七五九頁。

6 『大正藏經』二五卷一〇七頁。

7 『大正藏經』三三卷七五五頁。

8 『大正藏經』三四卷四九頁。

9 『唱法華題目抄』(一八九・二〇五頁)

10 『災難対治抄』(一六六頁)には喜根菩薩と不輕菩薩の行跡が列記されている。

11 同様の説示が、『南条兵衛七郎殿御書』(三二六頁)、『兄弟鈔』(九二二頁)にも見られる。

〈キーワード〉 日蓮、悪知識、苦岸比丘、勝意比丘

(立正大学講師)